

原告書籍	被告書籍1 (「運命の激数占い」)	被告書籍2 (「激数占い」)
<p>1 旧暦に基づく算出 (原告書籍21～22頁) 年の時間の出し方 数盤では、時間の中でも特に重視するのが年の時間です。この時間数が大きな器になり、その大きな器の中に、月の時間が入り、その月の時間の中に、小さな入れ物である、一日という時間が入ります。このように時間を三段階に重ね合せて解釈します。 〔西暦年数を基本として求めます〕 西暦年数を一つ一つ加えて単数化した数が、その年の年数です。以下、例をあげて説明します。 〔例〕 昭和38年卯(1963) <math>1+9+6+3=19</math> もう一度加えて下さい。 <math>1+9=10</math> もう一度加えて下さい。 <math>1+0=①</math> ※ この場合かならず〇印で囲んで下さい。 ※ 〇印で囲んだ数は時間数を表わします。 (原告書籍24頁) 〔年の区分〕 生年数を出す時、一番大事な観点は、暦における節入で、入門利心着がかならずと言ってよいほど、間違いを起こすところですから、何回も繰り返し返して、記憶下さい。 毎年の立春から翌年の節分までを二年として区分けし、ます。立春は、平年は二月四日頃、閏年は二月五日頃が節入りとなり、従って一月生れ、二月節入り前に生れた場合は、前年で計算します。</p>	<p>1 旧暦に基づく算出 (被告書籍1の22頁) ひとっだけ気をつけていたきたいのは、この占いは旧暦がベネニスになつていくこと。です。つまり、一年間は、節分の2月3日までとなり、前年生まれに変わるのです。</p>	<p>1 旧暦に基づく算出 (被告書籍2の8～9頁) 宿命数とはなにか？ 激数占いの基本部分とも言える「宿命数」。自らに宿命づけられた数を算出する前に、知っておかねばならないことがあります。 人生は数に支配されている この世に生まれ落ちた瞬間から、「数」による人生の支配がスタートします。そして、その数による支配はこの世を去るまで続きます。生まれながらにして持っている性質、そして待ち受ける運命すらも支配するのが数。なかでも、人生に強大な影響を与える数字が「宿命数」となります。この数は、まさに「宿命」という名にふさわしい強力なパワーで、あなたの人生を支配するのです。とはいえ、「宿命数」がもたらすエネルギーをプラスのパワーとして取り込み、いかせるかどうかはあなた次第です。まずは自分の「宿命数」を知り、自分を知ることが人生を切りひらく第一歩となるでしょう。 宿命数は旧暦がベネニスとなる 古代中国の「数秘術」をYが独自に体系化したものが「激数」です。つまり激数に含まれる宿命数も旧暦がベネニスとなり、1年は、節分(2月4日)からスタートすると考えられるのです。たとえば、2006年は2006年2月4日～2007年2月3日まで、2006年は2006年1月1日～2月3日は、宿命数を考える上では「2005年」となることを覚えておいてください。 宿命数は9つにわけられる 人が生まれながらにして持っている性質や運勢を支配する「宿命数」は必ず、1～9の1ケタの数字になります。日常生活にあふれる、さまざまな数字は、すべて1～9の組み合わせでの構成が前提となっています。</p>

## 2 「命数」の出し方

(原告書籍90～91頁)

運命の謎を解くために数を用いる場合は、基本として年・月・日の三つの時間数(細部的には時刻も数読みする。)を用いますが、これらの時間数は個々の時間数ではあっても、これらの時間数を統轄した時間数ではありませんので、正しく時間内に在する命質を把握するためには、年・月・日を加起来、単数化した数を、命数として、この命数を基本数として、生年数の波動と一体化して、命質の変化を数読みします。

これらの基本の時間数を総称して、「静態数理」と名づけ、誕生時に固定化された生命質を象徴する数理として解釈します。それに対して、この基本の時間数を座標として、変化する命質を読むために、波動数を展開しますが、この波動数の在り方を、「動態数理」と名づけます。その意味では、周期波動の理論は、「動態数理」と呼ぶことができます。

命数(めいすう)は年月日の時間数を統一した数ですから、命に宿った時間とみること、時間に生まれた命ということもできます。その意味では、宿命の質そのものを象徴していと読むことができます。また命質の環境とみることでもできます。その意味では、運命を読む座標ともなりますので、命数の出し方を知る必要があります。

<命数の出し方>

生年数は西暦年数を暦の節入りによる区分法によって正しく把握し、一つ一つ加えて単数化します。

生月数は月の節入りを考えないで、表出された月の数をそのまま使用します。複数の場合は単数化します。(月数理の出し方と違って、初心者がよくまちがいがいやすい点です。)

生日数は暦の節入りを考えないで、表出された日の数をそのまま用います。複数は単数化します。

## 3 具体例

(原告書籍91～93頁)

[例1]

昭和29年(1954) 3月20日生。

$1+9+5+4=19$   $1+9=10$   $1+0=①$ 。3月

は生月の数が③ですから、そのまま使用します。20日の場合は複数ですから、 $2+0=②$ とします。そのうえで、年月日の単数を加えます。

$①+③+②=⑥$  この⑥を命数と呼びます。

## 2 「宿命数」の求め方

(被告書籍1の222頁)

生年月日を一桁にばらしたものを足して算出

まずは、激数占いの中心となる宿命数を求めましょう。宿命数は、自分の生年月日から算出します。算出方法は、とても単純。まず、生年月日をすべて一桁の数にばらします。そして、それをばらから足していくだけ。すべて足した数が二桁の場合は、またそれをばらして足し、一桁にします。そこで出てきた数が、あなたの宿命数となります。生まれた年は西暦で表します。

## 3 具体例

(被告書籍1の222頁)

たとえば、1981年2月1日生まれの方は、 $1+9+8$   $1+0=①$ 。2月20日として計算してください。

この場合、 $1+9+8+0+2+1=21$ となり、 $2$

$+1=3$ で宿命数は3となります。

〔例2〕

昭和35年(1960)2月4日20時生。  
この生年月日の場合は、年の節入りが2月5日寅の時刻からとなつていきますので、前年の昭和34年(1959)で計算します。まちがえないようにして下さい。

1+9+5+9=24 2+4=6 2月は生月の数が②ですから、そのまま使用します。4日は④とします。

⑥+②+④=12 1+2=③ この③数が命数となります。

〔例3〕

分りやすく生月・生日を単数化しますと、下記のようになります。

10月=① 11月=② 12月=③

生日は次のようになります。

10=① 11=② 12=③ 13=④ 14=⑤ 15=⑥  
16=⑦ 17=⑧ 19=① 20=② 21=③  
22=④ 23=⑤ 24=⑥ 25=⑦ 26=⑧  
27=⑨ 28=① 29=② 30=③ 31=④

4 「数霊盤」の数の展開

(原告書籍34～37頁)

数霊盤の数の展開

二図Cの九つの場を方形にしたのが次頁の五図Aで、アルファベットは九つの場の記号です。この記号で勘違いしやすい点は、アルファベット順に表現するのなれば、A・B・C・D・E・F・G・H・Iとならなければならないのに、H・Jとあるのは間違いではなからうかとの疑問です。

この疑問はもつともな点ですが、これらの場に数を展開します。この疑念を念頭に入れますと、①数がこの場に入った時には、①数と読むより、⑩数と誤読する危険性があるので、わざわざ飛ばして、そこにJのアルファベットの文字を記号として使用してあるのです。だから「J」として記憶下さい。(中略)

五図(A)は、二図(C)を変換したもので、場の数は全部で九つあります。

この数霊盤をつかって数を展開する場合は、陽数理の場合、A場に⑤数を入れ、アルファベット順に数を入れて行きますと、B図のようになります。この数理を陽数理といつて、頭在界に強く作用します。またB図の数理を「基本数理盤」

4 「命式」の作り方

(被告書籍1の116頁)

命式の作り方

激数を中心にすえて順番に数字を配置していき、あなたの人生傾向をはつきりと表す命式を作っていきます。

命式は、年の激数を中心にすえたものと、月の激数を中心にすえたものとをふたつを出し、両方を読んでいきます。出し方は両方同じなので、ここではひとつのやり方のみを説明します。

まず、命式の真ん中に、激数を配置します。そして、それをもとに、周囲に数字を配置していきます。数字の配置の仕方には法則があり、それに従えば難しいことはありません。

左ページでは、激数8の人の出し方を例にしています。まず、激数8を中心に入ります。そして、黒丸数字の順序に従つて、数字を配列します。最初の①の欄は左上の角。ここには8のひとつ前の数字7を入れ、②の欄の右下の角には、8のひとつあとの数字9を入れます。次に③の欄に9のひとつあとの数1を、④の欄に2を、⑤